
光刃

～ 優 ～

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光刃

【Nコード】

N5241C

【作者名】

く優く

【あらすじ】

深い闇の中にそいつがいた。完全に葬ったはずだった。甘かった。奴はまだ……。最高位の精霊である龍を受け継ぎし少年少女の冒険の旅が始まった。

第一刃 運命

「大切なものを護る為に貴様を倒しにここまで来た。」

そこはどこまでも荒廃した大地。新世界。作られた世界。灰色の世界。生物など何もいない。二人の男を除いては。

そこには純白の衣を身にまとった男と漆黒の衣を身にまとった男が対峙していた。二人とも刀剣を腰にさげていた。二人ともまばゆい輝きを放っていた。片方からはどす黒く重い光を、対照的にもう片方は神々しい輝きを放っていた。

「……………貴様の大切なもの。私から護り抜いてみよ。覚悟を見せろ、力を示せ。」

漆黒の男が言った。

「貴様が勝てば、私を殺す事が出来れば、この戦いは終わる。だが負ければ、すべてが終わる。どちらにしてもお前は何かを失なう。私が貴様に殺されることなど万に一つもないがな。己が無力であることを、勝てぬことを知って尚私に挑んでくるとはな。」

分かっている。目の前の男が強いことを。

分かっている。勝てる確率など皆無であることを。

分かっている。

分かっているんだ。

でも…それでも、負けられない。負けてはいけない。

「これ以上もう何も傷つけさせない。。たとえ僕が消えようとも護

らなくてはいけないものがあるんだ。」

純白の男は刀を片手で持ち、もう一人の男に向けた。

誓った。友を、世界を護ると。

約束した。絶対に生きて帰ってくると。

おそらく約束は守れないだろう。

でも誓いは必ず果たす。

「.....い
くぞ。」

「...レン。」

第二刃　のぞき

「オイ？見えたか？」

「もいちよつと高くしてくれ、おまけに湯気で見にくくてさ。」

「早くしろよ、俺も見たいんだから。」

一人の少年がもう一人の少年を肩に乗せている。全面大理石で出来ている巨大な風呂であった。男子風呂にはこの少年二人以外にはだれもいない。なんとかギリギリ壁の高さを目の高さが超えた。

「おつ、見えたぜ！……………」

「オイ！何してんだよ。早く降りろよ。俺にも見せろって！」

…返事がない。上のやつの方が震えている。

「どうしたんだよ？」すると壁の向こうから声が聞こえた。

「……………レン君……………とヨウ君…。何をしているのかな？」

上の少年と壁を挟んで少女がスゴい剣幕でこちらをにらんでいる。壁から顔を出せるだけの高さにいれたのは水で足場を形成していたからである。

「いや……………これは……………その……………」

少女の後ろに竜のような形をした水が出来始めた。

「レ…レイラ様が貧血や湯あたりで倒れていないか心配で……」

「何言ってるの！このスケベー！！」

そう言うのと同時に巨大になった水の竜がレンやヨウに向かって突っ込んだ。巨大な水の固まりが津波となって押し寄せ、それに飲み込まれつつも必死に風呂場の出口に向かって泳いだ。苦しい状況下で二人は同じ事を考えていた。殺される。なんとか脱出し入口の扉を閉めた。助かった。

気管に水が入ったと言ってむせてるヨウにレンが言った。

「あとちよつとだったんだけどな」

「コレで今年に入って4回目だぜ。」

「今まで何回覗こうと命を賭けたっけ？」

「ゆうに五十は超えるな。一番最初はヤバかったな。レイラのやつ加減というもんを知らなかったし。」

「そうそう、水に沈めた拳げ匂に、水圧を上げやがった。」

「あの時は死ぬかと思ったね。…こんだけ苦しんだ事だし、覗かしてくれたっていいのにな。」

「フッフッフ。」

「なんだよ？」

「水に飲まれる直前、レイラの水で宙にとばされた時に、見えたんだよ、胸までね。」

「テメー裏切り者！」

「まあまあ、てかそろそろ新しい方法考えねえとやべえよ。」

「そうだな。」

「だんだん水量が増してるし。いい加減マジで殺されかねないぜ。」

「なんで男子風呂だけ魔法封じかかってんだよな。」

「俺らみたいなやつがいるからだよ、それに魔法で上手く見れたとしてもレイラの奴に見つかったら……間違いなく消される」

「それもそうだな。」

アハハハハハハと二人顔を見合わせて笑っていた。

第三刃 僕らと世界

ここは魔法が存在する世界。

この世界には火の国や水の国、土の国などがいくつもあり、各国にはそれぞれ他とは隔絶した超絶たる力を持つ、王族なるものがいた。さらに、大きく古い国、例えば火の国には火竜という精霊があり、その精霊が宿りし剣、国によって杖であったり、斧であったりするが、そのような武器を代々その国の王または女王が受け継いでいる。また世界には異能力者という者もいる。

例えば魔法を一切使える者がいない家系に魔法を使える者が生まれたり、またその逆であったり。また変わった文字通り変わった能力を持つ者。それら、つまり突然変異の者をさす。

水の国と風の国は友好関係にあり、ヨウやレイラはよく遊ぶことがあった。レンは物心つく前から、風の国にてヨウと同じように育てられた。

王族には体にその国特有の印があるが、レンの体にはどこにもそれがなかった。レンはおかしいなとは思っていたが、にもそれがなかった。レンはおかしいなとは思っていたが、誰に聞いても決して自分の過去を教えてくれようとはしなかった。

レンがはじめて使った魔法は雷の魔法であった。

その時風の国の王であるシュナイザが二度と使うなといい、レンの体に魔法をかけた。莫大な魔力を使った封印魔法であった。

しかしレンは一人で再び魔法を使ってみたら、なんの影響もなく普

通に使うことができた。ヨウとレイラ以外の人の前では一度も使わなかった。バレたらどれほど怒られるかもわからない。

その者が使う魔法の特性は生まれで決まる。異能者といっても、一族と関係のある力を持つ。例外はない…はずだ。

もしかしたらと思い、雷の国があるのかと調べるため、古い文献を紐解いてみたのだが、何一つ関係する事柄すら見つからなかった。

唯一自分の過去に繋がる可能性も失い、自分の正体に悩んだ時もあった。

しかし今はヨウやレイラ二人と楽しく暮らしているので、そんなことは考えなくなっていた。無意識のうちに考えることを避けていた。

第四刃 迫り来る闇

「う…うめんなさい」

苦しい。まだ怒っているらしい。いい加減許してくれてもいいだろう。

風呂からあがった俺らはレイラに会わないように風の国の宮殿から抜け出そうとした。風の国と水の国はとても近く、いつもどちらかの国に集まってあそんでいたのだ。二人の逃走劇に話を戻すが、ヨウの力で少しなら空も飛べたが、それではすぐに見つかってしまう可能性があったため、城の抜け道を通ったのだが、レイラのやつが魔法をすでに仕掛けてて、見事にそれにはまってしまった。

それは箱のような水の塊であった。あいつ俺らの逃げ道を把握しているらしい、最近では逃げ切れた試しがない。これも水以外の魔法を封じる魔法封じが施されており逃げようがない。二人とも泳ぎは得意だが、魔法のせいで体がうまく動かせない。酸素が…ヤバイ…死ぬんと思うていたら、レイラが水の檻の前に来て、どうしたの？って笑顔で言った。…この女…マジで殺す気だ…

「がばっがばがばがば！(本当にすいませんでした!)」

ヨウが水の中でなんとか土下座しながら言った。

「がばがばがばが。 (もう二度としないので許してください。) がばがばがばがばがば。 (マジで死んじゃうって。 お願いだから助けて。) 」レンも謝る。

「なんて言ってるか全然分かんないよお。ちゃんと言わなきゃ。
…《ごめんなさい、とってもかわいいレイラ様。レイラ様の美貌を
見たくてついやってしまいました。もう二度とこのようなことは致
しません。お詫びに一生あなた様のしもべにさせてください。》っ
てね。」

この女あ！調子にのりやがって！とは思いつつもさすがに苦しい。
二人とも必死に、

「がばがばがばがばがばがば…」ヤバいマジで息が…

「そろそろ許してやるか。」そういつてレイラは指を鳴らした。

『パチン』という音と共に水の檻の形がくずれ、あたりは水浸しに
なった。

「どう？少しは懲りた？」

「はい……………な訳ねーだろ！」レンはそう言ってレイラと反対の
方にヨウと一緒に駆け出した。

「隙あり！」

ヨウがレイラのスカートを風の魔法で完全にめくりあげた。

「きゃー！何すんのよ！」急いで手で押さえたが遅かった。

「ピンクのパンツが見えた！」ヨウが走りながらガッツポーズを
する。

「レイラちゃん、かわいいー。」レンも走りながら言う。

「もう絶対に許さないんだから！」

この時すでに始まっていたんだ。

同時刻 ある国の山中

黒い影が2つ…

「あーあ、だりーなあ。」 人らしからぬ形をした者が最初に口を開いた。

「まあそういうな。」 もう一人は人のような形をしている。

「風の国だっけ？」

「ああ、そつだ。」

「即行で殺して、奪い取れば良いじゃないか？
：なあ、レルガ？」

「それでは意味がないんだよ。

「なんでだよ。」

「まあ直にわかるさ。」

「まったくム力つくなくお前は。」

『ガアアアアッ』。突然木々をなぎ倒し、体長10メートルはあるつかという恐竜のような怪物が現れた。背中から巨大な人の腕のようなものが生えている。

「うっせんだよ。」そう言い終わる前に、目の前にいたはずのそれは肉片になっていた。

「もう少しで着く。」

「はあー疲れた。」

ここは風の国の北西にある平原。三人は並んで平原に寝そべっていた。やわらかな日差しが彼らを照らしていた。心地よい風が彼らを頬をなでる。

「いつまでもこうしていられたらいいのにな。」

「そうだな。三人ですっと…」

「何、年寄りみたいな事言ってるのよ。いつだって来れるじゃないの。」

「でも老けたレイラは見たくないな。…な、ヨウ。」

「そうだな。いつまでもかわいい……って何言わすんだよ!」ヨウの顔が赤くなる。

「いつまでもかわいい……何?」レイラも少し顔が赤くなっている。

「か、かわいくねー女のままだろ。って言おうとしたんだよ。」

「おやおや、ヨウ君。顔が赤いよ。ホントはなんて言おうとしたのかな?」レンは楽しそうにからかっている。

「そう照れるなって。……誰だ?」そういつ

て上半身を起こし、腰にさげていた愛刀「白刀」の柄に手をかけた。

「何言ってるんだよ?」ヨウが不思議そうに聞く。

急に目の前が光り、突然男が現れた。見たこともないような白い服を着ており杖を右手に持っていた。

「驚かしてすまない。訳あってこうして来なければならなかったんだ。」

「何者ですか？」レンが鋭い目で睨みながら聞く。

「怪しい者じゃないといっても信じてくれないだろうから、怪しい者でいいよ。伝えなければならぬことがあってね。」

よく見るとその男、ところどころに傷を負っている。

「レン君…というのかな君は。腰にさしている剣、白刀を完全に解放できるようになってはいけない。」

「なぜ知っている？それになぜ解放を止める？」

「理由を言ってる時間はない。あと、王に伝えてくれ。闇が…迫る…と。」

「今すぐに王宮に向かって走れ。」

「は？」

「早く！やつらが来る前に。」

「分かった。行くぞ！早く！」レンは二人を連れて走り出した。

「オイ！どうなってんだよ。なんでよく分からないあいつの言うことを聞く？」

「ヨウ君感じなかった？妙な力が二つだんだんと近づいてくるの。かなり力を抑えていたみたいだけど、重く、どす黒い魔力が溢れ出た。あの人は、よく分からないけど悪い人には見えないの。」

平原をぬけた時に、三人の足が止まった。まったというより止めら

れたという方が正しいのかもしれない。なぜか足だけでなく体がピクリとも動かない。

「そんなに急いでどこに行くんだ？」

第五刃 旅立ち

目の前の景色が揺れた。そして空間が裂け、そこから二人の男が現れた。

『ビリビリッ』

空気が魔力で震えている。

息が苦しい。体中が重い。押しつぶされそうだ。震えが止まらない。立っているだけで精一杯だ。怖い…怖い…

「君がレンと言う者か？」

男の声がした。

「私達の魔力を受けて体が上手く動かないか。まあいい。」

逃げないとヤバイ。どうすればいいんだ。ヨウやレイラも動けないか。もし動けたとしても、逃げ切れはしないだろうが。

「先ほどの男に何を言われたか知らないが、忘れた方がいい。そのかわり面白い事を教えてやろう。」

そいつは続けた。

「お前の持っている剣には龍が封印されている。それもその二人の継ぎし水龍や風龍などとは比べものにならない力を秘めたな。それにお前は魔法が上手く発動できないだろう。魔力もその二人の足元にも及ばないはずだ。なぜか…それはお前が無力だからではな

い。一部の者が剣に、そしてお前に封印を施したからだ。」

何を言っているんだ？こいつは…封印…だと？確かに雷の魔法を使うと言われた事があるが、封印したというなら完全に使えないはず。

その男が右手をレンに向けた。

何をする気だ、こいつ…

目を閉じて訳の分からない呪文のようなのを呟いたあと、男は再び目を開き、

「君を呪縛から解き放ってあげよう。」

そう言った瞬間、手から出たどす黒い光がレンの体を包んだ。

「あああああああああああああつ！」

レンの体中に激痛がはしる。

「今は分からないだろうが、だんだん君は本来のあるべき姿に戻っていくだろう。」

光が消えるとともに、レンに向けてた手を下ろした。体中をはしる激痛も同時に消えた。

「君は本来、こちら側にいるべき者だ……来たか。」

『烈爪。』

《ザザザンッ！！》

一瞬で先ほどまで男達がいたところの地面が真っ二つに裂けている。
男達はいつの間にか後ろにさがっていた。

「お前たちはさがっている。」

男達と俺らの間に突然現れたのはシュナイザ様だった。

こんなシュナイザ様見たことない。なんて魔力だ。体中から魔力が溢れ出るのがわかる。しかしそれはとても温かい気がした。

「コイツ、殺していいか？」男の一人が口を開いた。

「その必要はない。」

それにお前では今は無理だ。例の者たちの一人だぞ。すべき事は終えた。帰るぞ。」

「逃げる気か？」

シュナイザが問う。

「ガキを三人守りながら、俺らの相手をして勝てるでも思っているのか？」

そついつて手を上にあげると、手のひらの中に黒い塊ができた。

「待て！」

シュナイザがそう言い終わる前に二人は黒い光に包まれて消えてい

った。

奴らは去ったが、レンもヨウもレイラも固まっていた。

… 白い服を着た男

… 二人の男

… 剣の封印

訳が分からない事ばかりだった。

俺は何者だ？ レンは自分の正体から今まで逃げ回っていた。知るこ
とが怖かった。踏み出す勇気がなかった。答えてくれないならそれ
でいい、その方がいいと、心の中で思っていたのかもしれない。

今度は自分から踏み出してみよう。レンは口を開いた。

「シュナイザ様。あの…」

その言葉を遮るように、

「あとで話そう、レン。みんな疲れたろ。ひとまず城に戻ろう。」

そこにはいつもの優しそうなシュナイザがいた。

4人は城に向かって歩き出した。

4人は風の国の城に帰ってきた。

「…レン君。後悔するかもしれないが、それでも聞きたいか？」

最初に口を開いたのはシュナイザだった。

「はい。逃げないって決めましたから。」

「わかった。……………君は今は無き、雷の国の一族の王族の者だ。」

シュナイザは続けた。

「雷の国は昔、千年前の大戦より前にはまだ存在していた。とてつもない力を持った国だった。そのために、自分自身の力に吞まれやすかったのかもしれない。」

…そして闇に堕ちた。ある者：魔帝と呼ばれた者を指導者とし、世界を壊そうとしたのだ。しかし闇に堕ちなかった者が一人だけいた。その者の名はティーガ。後の大戦で、人類を勝利に導いた者だ。その命と引き替えに…。」

「彼と他の国々によって雷の国はこの世から消え去った。雷の国の

民は皆殺しにされた。一度完全に闇に堕ちた者はもとに戻ることはできないからだ。しかし雷の国の者がもう一人生き残っていたんだ。そいつはのちの大戦を引き起こした者だ。多くの者達が死んだ。子供も、大人も、老人も、みんなだ。」

「よって雷の国はすべての人々の心に深い傷を負わせて、記憶の隅に封印された。書物にもかかれることのないものとなったのだ。」

… 僕の体にはそんな一族の血が流れている。人々を苦しめ、殺した者達と同じ血が。

レンは啞然とした。無理もない。事実がそうさせるものであるのだから。

そんなレンを見てシュナイザが言った。

「確かに君は雷の一族の者だが、その体には父である英雄ティーガの血が流れている。だが、そんな君を危険だと言っ者たちがいた。父親は英雄であるがまた一族の血がその子を悪魔に戻すかもしれない。だから殺せと。」

もちろんそれを私は止めた。親友であるティーガの頼みでもあったから。剣と君への封印、そして私が見ているのを条件として、なんとか君を守れた。」

ヨウやレイラは必死にレンに何か話そうと考えていたが、かけてあげられる言葉はなかった。

「僕の存在がいつか周りを傷つけるかもしれないのか…」

レンが震えた声で言った。

するとシュナイザがレンの頭を撫でながらニコツと笑って、

君はそんなこと一度もしなかったし、これからもそんなことしないのはわかっている。だからヨウのレイラちゃんの友達になってそばにいてもらった。」

頭を撫でていると、レンの手の平に目がいった。

「レン君！その印をどこで！？」

急に大声になって聞いた。

「さっきの奴らの一人に何かされたのですが。」

シュナイザは急に険しい顔になり、

「その呪いはね、雷族に伝わる禁術なんだ。過去に数人が使った呪いでね、
放っておくといずれ君が君でなくなってしまう。」

レイラが驚いた顔をして口を開いた。

「レンがレンでなくなるって、どういことですか？」

「心の闇を解放する呪いでね。心を強くもっていないと闇に吞まれてしま。」

「どうしたら解けるの？」

ヨウが聞く。

「術をかけた者を殺さなくてはその呪いは解けない。しかし先ほどの二人のうちの一人ではない、どんな魔法を使ったかは知らないが、その者を媒介とし呪いをかけた奴がいる。」

「誰なんですか？」

今度はレイラが聞いた。

「魔帝だ。その魔法を使えるのは現在魔帝しかない…はずだ。」

「殺したはずでは？」

「そうだ。葬り去ったはずだ。しかしそれが葬り去った気がしてただけで何らかの方法で生き長らえ、禁術を使い、蘇ったか… 最近世界各地で悪魔が増えてきているのはもしかしたら奴のせいかもしれないぬ。」

「僕が死ねば誰も傷つく心配もないんだね。」

レンが重い口を開いた。

「何言ってるんだよ。俺の親友は人を傷つけるような奴じゃない。俺が一番わかってる。」

「そうよ。例えレン君が雷の一族だとしても、レン君はレン君よ。」

「もし二人を傷つけるようなことがあったら…俺…」

「大丈夫だって。殴ってでも、目を覚まさせてやるさ。」

「殴らなくてもいいじゃない。」

「例えばの話だよ。」

……しばらく黙ってからレンが言った。

「ありがとう。……俺は雷の一族の一人として、魔帝を倒してくる。完全に復活してまた世界を壊しにくる前に。自分を流れる血の束縛から逃れるために。」

「さーで、そうと決まれば、行くか。魔帝退治に。」

と、ヨウが言った。

「何言っただよ。俺のためにお前が命を懸ける理由はない。お前まで危険にさらすわけにはいかない。」

レイラも一度目を閉じて、またゆっくりと開き、

「そうね、行きましようか。」

「レイラも何言っただよ。」

「言っただしょ。三人で、ずっと……一緒にっ。あなたが何と言おうと、離れないんだから！」

ヨウがニヤつきながら、言った。

「何それ？告白？良かったなレン、一生あなたについて行きますだって。結婚式は帰ってきてから挙げるか？」

「な…ち、ちがつ、ばか！」

顔が真っ赤になり頭から湯気が出ている。

レンも赤面する。

「そういうわけだ、レン君。君は一人じゃない。仲間がいる。何よりも代え難い仲間が。ヨウもレイラちゃんも君の苦しみを背負ってあげようとしている。一人で背負い込むもんじゃない。君はそんなに丈夫じゃない。人は誰も一人で生きていけるほど丈夫じゃないんだ。だから仲間が、友がいる。無理をする必要なんかないんだ。君は幸せなんだ。君のことをこんなにも大切に想ってくれている友がいる。二人を信じてみてはどうだい。」

「…はい。ヨウ。レイラ。……………ありがとう。」

レンの目から涙が一粒頬を伝ってながれた。

「俺ら、親友だろう？一緒にレイラに苦しめられてきた。」

ヨウがレンに笑いかけた。

「失礼ね。二人がお…をの…こうとしたからじゃない。……………レン君。私たち、仲間だよ。」

シュナイザは二人の言葉を聞いて笑っていたが、真面目な顔にもどり、

「では、魔帝がいるであろう場所までの道を教えよう。 奴の居場所に行くには、いくつかね封印を解かねばならない。封印を完全に解き、解放できるようになった白刀を使わないと奴の居場所への道は開かれない。白刀に宿る龍の力は五つの強力な玉に分けて封じてある。君の力もその玉の中だ。」

「その玉はどこにあるのですか？」

ヨウが聞いた。

「風、水の国を除いた、世界の五つの国にある。しかし私が取りに行くことは出来ない。君を助けるためにした約束を破る事になるからだ。頼んでも渡してくれないだろう。それに今はあまり交流がない国々だから、どうなっているのかもよく分からない。道のりが書かれた地図を渡そう。」

「ありがとうございます。」

「すまない、私が今できるのはこのくらいしかないんだ。」

「十分です。」

「あと、一つっておくが、もし魔帝が本当に生きていたら、知らせてくれ。さすがに奴が相手では無理だろう。」

「分かりました。では行ってきます！」

「待つんだ。今出ては外は危険だ。明日の早朝に出発しなさい。」

「最後に、一つ。重要な事だ。」

そういつてシュナイザはレンの手に白い布を巻いた。

「この印は決して見られるな。それと人前で雷の術を使うな。」

「何でそれを？」

「君が封印を施された、使うなと私が言った翌日に使った時から知っていた。」

レンは下を向いた。

「バレてたんですか…」

「そんなことはいい。城の外では極力使うなよ。人には絶対に見られるな。雷の力を利用しようと考えてる者は世界中にいる。いや、いたというべきだな。雷は恐怖の象徴であると同時に、力の象徴だからな。それに君の存在は隠されている。公にはなっていない。知られたら必ず狙われる事になる。全ての封印を解き、力を自分のものに出来るまで封印するんだ。そうすれば君は自分を、友を、そして世界を傷つけようとする者から護ることが出来るようになる。それまでは…。それに君を城。それと人前で雷の術を使うな。」

「何でそれを？」

「君が封印を施された、使うなと私が言った翌日に使った時から知っていた。」

レンは下を向いた。

「バレてたんですか…」

「そんなことはない。城の外では極力使うなよ。人には絶対に見られるな。雷の力を利用しようと考えてる者は世界中にいる。いや、いたというべきだな。雷は恐怖の象徴であると同時に、力の象徴だからな。それに君の存在は隠されている。公にはなっていない。知られたら必ず狙われる事になる。全ての封印を解き、力を自分のものに出来るまで封印するんだ。そうすれば君は自分を、友を、そして世界を傷つけようとする者から護ることが出来るようになる。それまでは…。それに君を城の外に出したとバレたら国としてマズいことになる。」

「力を封印…か。」

たとえ僕が狙われ、殺されようがヨウとレイラは必ず護る。

そう誓ったんだ。必ず護ると。でもその時はまだ知らなかったんだ。世界の闇を。己の無力さを。そして、運命を。

翌朝 出発の日

まだ太陽も出ていない時間にレンとヨウとレイラは国を背に歩き始めた。

城の最上階で窓から三人を見つめる男が一人。

「ティーガ。あの頃を思い出すな。」

空に向かってそう言った後、彼らの方を見て言った。

「必ず帰って来いよ。」

三人の旅が始まった

第六刃 鬼

「迷ったな。」

「迷ったわね。」

「ああ。完全に迷った。」

風の国を出た三人は、最初の国 砂の国に向かっていた。途中にある、鬼の森の中にいた。

「まだ昼なのに暗いな。さすが鬼の森だな。木々までバカでかい。」

周りの木々はゆうに数十メートルに達し、日の光がほとんど差し込まない。それにここの生物は異常な成長をする。草木も動物も……

「どうしようか？今まではまだ悪魔に会ってないけど、夜に出てこられたら、圧倒的に不利だ。ただでさえこんな森の中なのに。」

座りやすそうな木に腰を下ろし、レンが言った。

「今日中に出られそうもないし、なるべく安全な場所を探して、そこで隠れて、また明日出発しましょ。」

近くの木に残りの二人とも座った。

「そうだな。この森ヤバいのがいるらしいし。」

「じゃあ二手にわかれましょ。レンとヨウと一緒に私が一人で。」

「何言ってるんだよ。女一人で行かせられるかよ。」

ヨウが言った。

「いいの。ヨウと行ったら悪魔に襲われるのより早く襲われるかもしれないし。レンも上手く魔法使えないし。」

「んなことしねーよ!」

「ははは。まあいいじゃん。レイラそれでいいよ。でも気をつけて。」

レンが笑って言った。

「ありがとう。レン。それじゃ、日没前にまたここに。」

レイラは森の中を歩いていった。

「たく、あの女。せつかく人が心配してるっていうのに。」

「まあそんなに怒るなって。それじゃあ、僕たちも行くつか。」

二人はレイラと反対方向に歩き出した。

「なあヨウ。お前、剣に宿る龍にあったことあるか？」

しばらく歩いていると、レンがヨウに話しかけた。

「風龍にか？あるよ。二回。初めて剣を授かった時と国の外にレンと抜け出して悪魔に殺されかけた時。」

…………二回目の時、覚えてるか？レンも見たる。巨大な風の斬撃。あれは俺がやったんじゃない。俺に死なれては困ると、風龍が守ってくれたんだ。

「そうだったんだ。」

「あれ以来、力の解放の初期段階である、《解》が出来るようになった。けど、まだそれだけだ。」

「次の段階である《牙解》に至るためには、いつでも風龍と対話出来るようにならないといけないらしい。そのためには龍に認められないと。」

ヨウはヨウの剣「風刃」を鞘から抜き、刀身を見ながら言った。

「さてそろそろ戻るか。」

《ズシーン、ズシーン、ズシーン！》

「何か来たな、それも相当でかい。ひとまず隠れよう。」

二人は木の上に登った。

木々の間から出てきたのは、巨大な鬼だった。体が赤黒い。持っているのは、話しによくある金棒ではなく、これまた巨大な剣だった。周りに小さな、それでも人間位の大きさの鬼を引き連れて。

「ヤバい。レイラのいる方に向かってる。どうする？レン。」

「ひとまず奴らより早くレイラの元に戻ろう。」

二人は鬼達に気付かれないように、木をおりて、少し距離をとって駆け出した。音をたてないように、それでも早く走るのは難しかった。

「レイラの魔力…」

「俺も感じた。あいつ戦ってんな。あの鬼がきたらまずい事になる。」

「なんとか鬼より早く行けそうだ。」

レイラの魔力を感じる方へ二人は走っていた。

ようやくレイラを見つけたが、レイラは球体状の水のシールドをはって、その中にいた。それを壊そうとする鬼が十数体。

「あの数なら殺れる。」

「いくぞヨウ。あの巨大なのが来る前に。」

「レイラ救出と行きますか。」

二人は隠れていた木から飛び出した。

「風刃、《解》」

剣が風を帯びて、光る。その光が消える頃には二体が真つ二つになっていた。

「風刃　―双龍―」

一本の剣が最初より少し短く、

そして風を帯びた二刀に変化した。

鬼達がこちらに気付き、襲ってくる。

居合：『烈閃』

目の前に迫る一体をレンが高速の斬撃で斬り捨てる。

殴りかかり、ひっかいてくる鬼達の攻撃を右へ、左へとかわしながら、一体ずつ斬っていく。

《ズシーン、ズシーン》

「あの足音だ、もう来やがった。レン！さがれ！一気に殺る。」

ヨウが剣を一本を鞘の位置に、もう一本を反対側に腕をクロスさせる。

「おおおおおおおおおおお！」

体中を風が包む。

『穢塵』

クロスさせた腕を元に戻しながら、魔力を剣に集中し圧縮して飛ばす。その際周りの風が乱れ、巻き込まれて、無数の斬撃を生じさせる。

《ズザザザザ……！》

ヨウの前方は無数の風によって残りの鬼も木々もバラバラになった。鬼の血が辺りを真っ赤に染める。

「よし、いくぞ。」

ヨウの声と共に三人は走り出した。

しかし、二人についてきてはいるが、レイラがまだ水の球体から出て来ない。

「そんな邪魔なもん解けつて。早く隠れないと。」

「いいの！これで！」

「いいわけないだろ！無駄に力使ったって！」

走っていると、洞窟を見つけることができた。

「あそこに隠れよう。」

三人は中に入っていた。レンは入口に残り、そして鞘を入口の地面に刺して魔力を込めた。

魔術『魔封術ー白ー』

《ズシーン、ズシーン……………》

「……………行っただか？」

「ああ。」

ヨウの問にレンが答える。

「そろそろレイラも魔法解いたら。奴らもいったし。」

「いいのー!!」

「…しょうがないなあ、もう。」

レンは球体の中に腕を突っ込んでレイラを引っ張り出した。

「キャッ!」

水の球体から出てきたのは、裸のレイラだった。

「あ……………」

「バカ!ー!!」

腕を掴んだレンの手を叩き、ものすごいビンタを食らわしてすぐに水の球体の中に戻った。

「すみません。」

レンは球体の前で土下座して謝った。右の頬がはれている。少し涙目だ。よっぽど強烈な平手打ちだったのだろう。

「まあ、許してやれよ。レイラ。悪気があった訳じゃないんだし。そもそも何で裸なの？」

「……………歩いて少し汗かいてたから、川で水浴びしてたら急に襲って来られて…………。」

「いやーしかないもん見せてもらったなあ。なあ？レン。」

「やめてよ。怒るわよ。」

「冗談、冗談。服返してやるから怒るなって。」

「はい？」

「だから服返してやるから。」

「え……………？」

「なんか服が落ちてたから、逃げる時に一緒に持ってきたんだよ。」

「てことは私が…なの知ってたのよね？」

「もちろん。」

「許さない!!」

球体から水でできた大きな手が出来て服を取り返そうとするが、ヨウが服を抱えたまま、避ける。

「返して欲しかったら、その中から出て来きなよ。」

「いいわよ。」

そういうとレイラが球体から裸のままで出て来た。そのままヨウの目の前まで歩いてきた。

「レ…レイラ？」

「隙あり。」

後ろから水の手で両足を掴まれた。目の前にいたはずのレイラは消えていた。

「残念ね。蜃気楼の応用魔法、幻水。どう？本物の私みたいだったでしょ。」

「きたねーぞ！」

両足を掴まれ逆さ吊りになっているヨウが言った。

「さーてヨウ君。覚悟はいい？」

球体の中で服を着たレイラが歩いてきた。

「ごめんなさい！……………ああああ！」

二人がそんなことをしているなか、レンは地面から鞘を抜き、洞窟の外に出ていた。

あの鬼。最初から俺らに気づいてやがる。初めて見た時じゃない。それより前。森に入った時から分かってやがった。俺が洞窟に張った結界も見破られてたな。なぜ気づかないふりをしてたんだろう……

……………

この森を奴をうまく撒いて出るのは不可能だな。俺らで奴を倒せるか……

「レン君！。もう寝ようよ。」

「俺は見張りをするからまだいいよ。」

「いいって。ヨウが見張りをするから。一緒に寝よう。」

「い、一緒に寝る？」

「そ、そんな意味じゃないよ！」

戻ると辺りは水浸しになっていて、所々に血が…
何があったのかは知りたくない。

ヨウがボロボロの格好で入口に行った。通り過ぎ様に、

「人の皮をかぶった鬼だ。」

と言っていた。ふざけるのもほどにせねば…

レイラは一番奥で葉っぱを敷いて寝た。俺はその少し手前に寝ていた。寝たと言っても仮眠で、数時間後にヨウと代わるために、入口に行った。

「起きてたのか？」

「いや少し寝させてもらったさ。」

木々のすき間から月明かりが差し込む。

「見張り代わろうか？明日は鬼と殺り合うことになるぞ。」

「分かってるさ。いいよ。レイラにも言われたし。もう少し月を眺めていたいんだ。」

「お前強いな。十数体もの鬼を一撃で。」

「全然ダメさ。父親から習ったあの技は目標を塵のように消し去って初めて完成なんだ。アレでは強い奴にはたいしたダメージにならない。ましてやあの巨大な鬼にはな。」

「どうやって倒す？」

「どうにかするしかないな。」

「俺にも力があれば…。」

「十分強いよ。剣も魔力も封じられてるのに。」

「ヨウやレイラの足元にも及ばないのは事実だ。足手まといになつてしまう。」

「ならないさ。いずれ力を取り戻した時に助けてくれればいい。お互いさまさ。足りないところを補い合う。それでいいんだよ。」

「すまないな。」

「なあに。気にすんなって。それと今度レイラに殺されかけた時に助けてくれればいいさ。」

「はははは。あんまりやりすぎんなよ。かばいきれないからな。」

「分かってる。もう寝ろよ。少し剣と対話してみようかなと思ってさ。今日は代わらなくていいよ。それに明日の朝に俺がやってなかったら、またレイラに怒られる。」

「すまないな。お休み。また明日な。」

レンは洞窟に戻って行った。レイラの寝ている少し前まで来て止まり、座った。

どうしたら強くなれる？明日鬼を倒すための力。白刀を鞘から抜き、刀身を見つめて言った。

「教えてくれよ。雷龍……」

第七刃 閉じゆく道

「おはよう。レン君。」

目を開くと目の前にレイラの顔があった。

「わっ…お、おはよう。」

「遅いぞ。」

ヨウが壁に寄りかかってた。

「悪い。夢をみててな。」

「どんな夢だったの？」

「秘密だ。」

「誰かが俺を呼んでいた。深い深い暗闇から。何度も何度も。誰だったんだろう…」

「人に言えないような夢を見るなんて。レイラの体はレンには刺激が強すぎたな。」

「そんなんじゃないよ!」

三人は出発の準備をした。今日中には森を出たい。

「よし。行くか。」

「ヨウ。方角分かってんのか？無駄に歩き回って消耗したら、鬼に間違いなくやられるぞ。」

「大丈夫。夜のうちに確認しといたから。方角も現在地もバッチリだぜ。」

自慢げに言った。

「行きましようか。」

三人は洞窟を出た。森の東から入って来て西ぬける予定が、南の方に来ていたのだ。三人は北西の方向に歩き出した。

やはり暗い。夜も朝もあまり変わらないようだ。進んでも進んでも同じ景色が続いた。

「…おかしい。」

レンが口を開いた。

「ええ、そうね。」

「何が？」

「鬼がない。それに静かすぎる。」

あれだけ鬼を斬ったんだ。来るであろう場所は見張っておくはず。

それが気配すらしない。

「そついやそうだな。」

嫌な感じがする。洞窟を出た時から少し違和感を感じていたのだが。

「ヨウ、ちょっと飛んで周りを見てみてくれないか？」

「ああ。」

そう言ってヨウは風の翼をつくり、飛んでいった。

「嘘だろ………？」

空が真っ赤だ。さっきまでは木々で見えなかったが血のような赤色だ。

「あれ？」

翼が空気に溶けるように消えた。

「ああああああ！」

「危ない！」

レイラがとつさに水のクッションを作った。

《バッシャーン！！》

水のクッションもヨウの重さに耐えきれず、落ちた瞬間に破裂した。

「いつてー。まだ怒ってんのかよ。」

「違うわ。なんか力がなくて……」

空が赤い……………

力がでない……………

そうか！

「ヤバい！戻るぞ。」

レンが走り出した。

「やられた。時空間魔術で洞窟一帯ごと、異界にとばされてたんだ。」

「戻れるのか？」

「あの洞窟のあたりに魔法陣があるはずだ。もしくは元の世界と繋がる空間の歪みが、前者の場合、反対魔法を使えばよし。後者の場合、歪みを魔力で広げるしかない。」

「ならレイラなら魔法陣とか得意だし、なんとかなるな。」

「そもそも簡単にいかない。この異界を作ったやつは魔力がだんだん失われていく魔術を付加した。歪みを広げる程の魔力が残っているか、それ以前に歪みはだんだん消えていくから、それに間に合うか。」

「まずいわね」

「異界から出れたとして、こんなものを創り出せるやつを減った魔力で倒せるか……………」

「もういい！ひとまず脱出だけを考えよう。急ごう！」

「見つけた！！」

レイラが洞窟の外側に空間の歪みを見つけた。だいぶ小さい。直径三十センチメートル位の円の大きさだ。

「これを洞窟一帯を包むくらいに広げなくてはならない。魔力を用いた攻撃で衝撃を与えると、なかに吸い込まれ、元の世界に出てこられる。しかし小さいとこの異界と僕らの世界の狭間に取り残されることになる。」

「いいぜ。やってやろうじゃん。どうせそうするしか戻る方法はないんだろ？」

ヨウが剣を抜いた。

「私の力みせてあげる。」

レイラも剣をぬく。

レイラの剣は名を「優事^{ゆうじな}」という。

龍の涙から出来たといわれる、水分で形成されている剣だ。刃は青みがかったっており美しく、そして鋭い。水分から成っているとはいえ、相当な強度をもっている。

「風刃…」

「優雫…」

「《解》!!」

二人が同時に叫んだ。

「風刃　―双龍―」

「優雫　―零―」

風刃は二本に、そして優雫は丸い水の玉になった。見ていると中に吸い込まれそうになるような美しい玉だ。

「レイラの解放初めて見たがそんな形してんだな。」

「弱そうだなとか思ってるんでしょ!」

レイラは頬を膨らましてヨウを少し睨んだ。

「強いんだからね!」

「そんなこと言い合ってる暇ないぞ。時間が無い。」

二人を止めてレンが言った。

「正確な位置への同時斬撃。やるぞ。」

ヨウは、両足で地面をしっかりと踏みしめ、両腕をクロスさせた。

レイラは両腕を高くあげて伸ばしきり、両手を空に向けて広げた。その手の平に優柔をのせて。

レンは刀を鞘に戻し、柄から右手を離した。そして目を閉じる。左手は鞘をつかみ、腕は軽く曲げて柄の前に構える。

「いくぞ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5241c/>

光刃

2010年10月14日01時43分発行